様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5　月　26　日現在

機関番号：32629
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520651
研究課題名（和文）　ジャコバン独裁末期のパリの民衆と「世論」

研究課題名（英文）　The People of Paris and their opinions at the end of the Jacobin dictatorship.

研究代表者
松浦　義弘　（MATSUURA YOSHIHIRO）
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：60229416

研究成果の概要（和文）：この研究の目的は、ジャコバン独裁末期のパリ民衆の動きと「世論」を解明することによって、「テルミドール９日のクーデタ」への見通しを得ることにあった。この課題を遂行するため、研究期間内に数度渡仏し、国立文書館やパリ警視庁文書館などで史料調査をおこなった。そしてこの史料調査の成果として、「テルミドール９日のクーデタとは何だったのか」「食糧と政治――食糧騒擾の時代における「自由主義」」など４つの論文を刊行することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to get some perspective on the coup d'état of the 9th of Thermidor by clarifying the movement of the people of Paris and their opinions. To carry out this task, I visited France several times and examined original materials owned by Archives Nationales, Archives de la Préfecture de Paris, and other institutions. As a result of this research, I published four papers, including "What was the Coup d'état of 9th of Thermidor ?" and "Food and Politics: <Liberalism> in the Age of Food Disturbances."

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：西洋近現代史・フランス革命史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：フランス革命、テルミドール９日のクーデタ、ロベスピエール、パリ民衆、48 セクション、世論、食糧騒擾、飢饉の陰謀、自由主義

１．　研究開始当初の背景

（1）ジャコバン独裁期のパリの民衆運動に関しては、A・ソブールの画期的学位論文『共和暦２年におけるパリのサン=キュロット』(A. Soboul, *Les sans-culottes parisiens en l'an II*, 1958)が圧倒的な重みをもっている。この学位論文は、ジャコバン独裁期における革命政府と民衆運動との関係を追求す

るなかで、共和暦２年ジェルミナル（1794 年３月末ー４月初め）に両者の関係の決定的転換点があったと主張した。すなわちこの時期に、革命政府がサン＝キュロット民衆の支持を得ていたエベール派を粛清したために、サン=キュロット民衆が革命政府から離反して民衆運動と革命政府との「同盟」が解体し、テルミドール９日のクーデタがもたらされることになったというのである。

（2）研究代表者は、平成 14ー15 年度の基盤研究Ｃ「ジャコバン独裁期におけるロベスピエールと『世論』」を遂行する過程でジャコバン独裁期のパリの「世論」関係の史料を読みすすめた結果、ジェルミナルにおける革命政府と民衆運動との「同盟」の解体にかんするソブールの主張は説得力のある主張とはほど遠い、と考えるようになった。そしてソブールの見解をパリ民衆の「世論」に焦点を当てて再検討し、「ジェルミナル」は革命政府からのサン=キュロット民衆の離反ではなく、逆に、革命政府とサン=キュロット民衆のより緊密な精神的結合をもたらしたことを実証した（「ジェルミナルのドラマとは何だったのか――革命政府とパリ民衆」『一橋大学社会科学古典センター　Study Series』No. 53 を参照)。

(3)そうだとすれば、民衆運動の研究はジェルミナルで終わるべきものではなく、ジェルミナル以後の民衆の動きと彼らの考えをとらえることが必要であり、その結果をふまえて、テルミドール９日のクーデタを再解釈する必要があるということになろう。そのような問題意識から、研究代表者は、平成 17ー19 年度の基盤研究Ｃ「最高存在の祭典と『世論』」で、ジェルミナル以後の 1794 年５ー６月のパリの「世論」を検討すべく、史料の調査と蒐集につとめた。その結果判明したのは、ジャコバン独裁末期のパリの民衆の動きや「世論」をとらえることがきわめて困難であるということであった。したがって、本研究においては、ジェルミナル以後のパリ民衆の動きや「世論」を掌握することが可能な史料をあらたに「発見」することによってジャコバン独裁末期のパリ民衆の動きと「世論」を解明し、テルミドール９日のクーデタへの見通しを得ることが課題となった。

２．　研究の目的

本研究課題の目的は、「ジェルミナルのドラマ」以後のパリ民衆の革命政府にたいする関係を明らかにするとともに、パリ民衆の日常的な動きや「世論」を把握することによって、テルミドール９日のクーデタへの見通しをつけることにあった。

３．　研究の方法

（1）本研究課題を達成するためには、フランス革命に関係する研究書と史料集を購入して幅広い視野を持つことが必要とされるだけでなく、できるだけ長期間渡仏して日本では参照し得ない史料の蒐集と解読をおこなうことが不可欠であった。

（2）このため、当該研究期間中、夏期や春期の休暇を利用して数度にわたって渡仏し、国立文書館やパリ警視庁文書館などで史料調査をおこなった。とくに平成 22 年度は、成蹊大学の学外研修制度の適用者となったため、４月から約６ヶ月間渡仏し、パリ警視庁文書館などの史料をもとに、ジャコバン独裁末期のパリ民衆の「世論」を解明しようとした。

(3) ジャコバン独裁期に逮捕された人物約２万人のうち「反革命的な言辞」「公民精神の欠如」などが逮捕理由であった人物のリストをパリ警視庁文書館の史料をもとにつくり、彼らの言動を、保安委員会によって逮捕された人物の個人調書がおさめられた国立文書館の整理番号 F/4577-4775[53] を調査することによって理解し、もってジャコバン独裁末期のパリ民衆の動きや「世論」を把握しようとした。しかしこの作業は完了しなかった。

４．研究成果

これまでの史料調査をもとに一定の成果が得られた。主な研究成果は、以下の２点である。

(1)「「テルミドール 9 日のクーデタ」とは何だったのか」では、テルミドール９におけるパリの 48 セクションの文民組織（セクションの総会、民事委員会、革命委員会）の行動とそれを正当化する言説を網羅的に検討することによって、クーデタ以前に国民公会の正統性がセクションの文民組織や活動家のあいだに浸透していたこと、したがってクーデタ側が勝利する可能性はほぼ皆無であったことを検証した。この検証結果は、Ａ・ソブールによる従来の通説にたいする反証であるとともに、Ｈ・ブルスティンやＢ・バチコなどのソブール以後の研究にたいする批判となっている。とくに、ロベスピエールが王になろうとしているという噂がセクションに流れたことが国民公会側の勝利を決定的にしたというバチコの主張は、史料上の根拠を欠いていることを指摘した。また、テルミドール９日におけるセクションの文民組織の行動とそれを正当化する言説を網羅的に明らかにしたことも、研究史の上では新しい試みであった。ただし、本論文における検討はテルミドール９日・10 日に限定されており、それ以前のパリ民衆の動きと「世論」の解明は、いぜん残された課題である。また、テルミドール９日のクーデタの帰趨を決定するうえできわめて重要な軍人組織の行動にかんする検証結果も、公表されていない。

(2)「食糧と政治――食糧騒擾の時代における「自由主義」」では、17 世紀末ー19 世紀半ばの食糧騒擾の時代は、固有の制度とふるまいと言説によって特徴づけられており、「自由」も「規制」や「保護」を前提にしていたことを示した。したがって、フランス革命における自由主義的経済政策も統制主義的経済政策も、食糧騒擾の時代における「自由」と「規制」の偏差と考えられることを指摘した。また、「飢饉の陰謀」という観念も、Ｓ・カプランが主張するように、1760-70 年代の穀物取引の自由化政策の時期に固有のものではなく、「飢饉」が消滅した 18 世紀初頭から食糧問題が社会問題に吸収される七月王政にいたるまでの時期に生じた食糧騒擾の随伴現象と考えるべきことを主張した。本論文では、食糧騒擾のありようはE. P・トムソンのモラル・エコノミー論には収まりきらないものがあることも示したつもりである。

(3) 以上の主要な研究成果のほか、当該研究期間中の史料調査の結果をも踏まえて、いくつかの成果が得られた。平成 20 年度には、山崎耕一『啓蒙運動とフランス革命』（刀水書房、2007 年）の書評論文である「シャルチエ以後の思想史研究はどのようなかたちをとりうるか」を公にし、成蹊大学で開催された国際シンポジウム「デモクラシーとナショナリズム」では、コメンテーターの立場から「フランス革命におけるナショナリズムとデモクラシー」について論じた。平成 21 年度には、スペイン史学会第 31 回大会において「ナポレオン戦争期のヨーロッパ」をフランス史の立場からコメントし、その要旨をス

ペイン史学会の『会報』に掲載した。そして平成 22 年度には、遅塚忠躬『フランス革命を生きた「テロリスト」　ルカルパンティエの生涯』(NHK 出版) を監修者として出版するのに尽力した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）
①松浦義弘、食糧と政治――食糧騒擾の時代における「自由主義」、思想、査読なし、No. 1043、2011、100-122.
②松浦義弘、「テルミドール９日のクーデタ」とは何だったのか、一橋大学社会科学古典資料センター　Study Series、査読有り、No. 65、2011、1-68.
③松浦義弘、フランス史からのコメント、スペイン史学会会報、査読なし、第 91 号、2010、14-16.
④松浦義弘、シャルチエ以後の思想史研究はどのようなかたちをとりうるか――山崎耕一『啓蒙運動とフランス革命』によせて、歴史学研究、査読なし、No. 843、2008、34-40.

〔学会発表〕（計 2 件）
①　松浦義弘、フランス史からのコメント、スペイン史学会第 31 回大会、2009 年 10 月 18 日、慶応大学三田キャンパス.

〔図書〕（計１件）

６．研究組織
(1)研究代表者
松浦　義弘（MATSUURA YOSHIHIRO）
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：60229416

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：